

皆様おはようございます。

いよいよ梅雨明けが近いようなこの頃ですが、蒸し暑い日々、皆様お元気でしたか。

ヘブライ書も真ん中を過ぎました。

天使を挙げ、モーセを挙げ、メルキゼデクを挙げ、レビを挙げ、アロンを挙げ、まさに旧約聖書と、そこに登場する父祖たちはイエス様を指し示しているところの書は語ります。

- 1 このメルキゼデクはサレムの王であり、いと高き神の祭司であったが、王たちを撃破して帰るアブラハムを迎えて祝福し、
- 2 それに対して、アブラハムは彼にすべての物の十分の一を分け与えたのである。その名の意味は、第一に義の王、次にまたサレムの王、すなわち平和の王である。
- 3 彼には父がなく、母がなく、系図がなく、生涯の初めもなく、生命の終わりもなく、神の子のようであって、いつまでも祭司なのである。
- 4 そこで、族長のアブラハムが最もよいぶんどり品の十分の一を与えたのだから、この人がどんなにすぐれた人物であったかが、あなたがたにわかるであろう。

サレムという国の事も詳細には分からず、メルキゼデクの父も、母も、系図も不明です。サレムはエルサレムの以前の呼び名であろうことが推測されています。

そのメルキゼデクについて、詩編 110 編ではこのように言っています。

詩編

ダビデの歌

110:1 主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵を／あなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。

110:2 主はあなたの力あるつえをシオンから出される。あなたはもろもろの敵のなかで治めよ。

110:3 あなたの民は、あなたがその軍勢を／聖なる山々に導く日に／心から喜んでおのれをささげるであろう。あなたの若者は朝の胎から出る露のように／あなたに来るであろう。

110:4 主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、「あなたはメルキゼデクの位にしたがって／とこしえに祭司である」。

110:5 主はあなたの右におられて、その怒りの日に王たちを打ち破られる。

110:6 主はもろもろの国のなかでさばきを行い、しかばねをもって満たし、広い地を治める首領たちを打ち破られる。

110:7 彼は道のほとりの川からくんで飲み、それによって、そのこうべをあげるであろう。

1 主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵を／あなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。

これは有名な、新約聖書でイエス様が引用された箇所です。

マタイ 22:42 「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。

22:43 イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。

22:44 すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。

22:45 このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどのようにしてダビデの子であろうか」。

4 主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、「あなたはメルキゼデクの位にしたがって／とこしえに祭司である」。

主なる神様、父なる神様は、イエス様をこのメルキゼデクの位に従ってとこしえの祭司とすると語られました。

このメルキゼデクは突如として登場し、実にイスラエルの父祖アブラハムからの捧げものを受け取りました。

7:3 彼には父がなく、母がなく、系図がなく、生涯の初めもなく、生命の終わりもなく、神の子のようであって、いつまでも祭司なのである。

7:4 そこで、族長のアブラハムが最もよいぶんどり品の十分の一を与えたのだから、この人がどんなにすぐれた人物であったかが、あなたがたにわかるであろう。

7:5 さて、レビの子のうちで祭司の務をしている者たちは、兄弟である民から、同じくアブラハムの子孫であるにもかかわらず、十分の一を取るように、律法によって命じられている。

7:6 ところが、彼らの血統に属さないこの人が、アブラハムから十分の一を受けとり、約束を受けている者を祝福したのである。

7:7 言うまでもなく、小なる者が大なる者から祝福を受けるのである。

7:8 その上、一方では死ぬべき人間が、十分の一を受けているが、他方では「彼は生きている者」とあかしされた人が、それを受けている。

7:9 そこで、十分の一を受けるべきレビでさえも、アブラハムを通じて十分の一を納めた、と言える。

7:10 なぜなら、メルキゼデクがアブラハムを迎えた時には、レビはまだこの父祖の腰の中にいたからである。

メルキゼデクは「彼は生きている者」とあかしされた人であり、アブラハムでさえも、そしてもっと言えばアブラハムの末裔であるレビも、モーセも、アロンも、祭司たちも、イスラエルの血統に属さないこの人に捧げものを与えたということを深く悟りなさいと聖書は語り掛けます。

しかし、「彼は生きている者」と語り掛けられたとしても、メルキゼデクもまた一人の人間でした。ですから、私たちは、このメルキゼデクという人の事を乞う考えることが出来るのではないのでしょうか。

どうしてメルキゼデクはこうもミステリアスで、「彼は生きている者」などという特別な呼ばれ方をするのか。それは彼が来るべきイエスキリストのひな形だからに他なりません。彼においては必ずしもアブラハムに勝るものではなくて、血統の外にいるものですが、彼のような、彼に似たものというお方が登場する時のためのひな形として、モデルとしてメルキゼデクは登場したのです。

7:11 もし全うされることがレビ系の祭司制によって可能であつたら——民は祭司制の下に律法を与えられたのであるが——なんの必要があつて、なお、「アロンに等しい」と呼ばれない、別な「メルキゼデクに等しい」祭司が立てられるのであるか。

7:12 祭司制に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずである。

7:13 さて、これらのことは、いまだかつて祭壇に奉仕したことの無い、他の部族に関して言われているのである。

7:14 というのは、わたしたちの主がユダ族の中から出られたことは、明らかであるが、モーセは、この部族について、祭司に関することでは、ひとことも言っていない。

7:15 そしてこの事は、メルキゼデクと同様な、ほかの祭司が立てられたことによって、ますます明白になる。

7:16 彼は、肉につける戒めの律法によらないで、朽ちることのないいのちの力によって立てられたのである。

7:17 それについては、聖書に「あなたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」とあかしされている。

7:18 このようにして、一方では、前の戒めが弱くかつ無益であつたために無効になると共に、

7:19 (律法は、何事をも全うし得なかつたからである)、他方では、さらにすぐれた望みが現れてきて、わたしたちを神に近づかせるのである。

神様はモーセによって民をエジプトから脱出させ、アロンの子らを祭司とされました。このようにして神様が祭司をお立てになられたのに、「なんの必要があって、なお、「アロンに等しい」と呼ばれない、別な「メルキゼデクに等しい」祭司が立てられ」たのでしょうか。

神様は、メルキゼデクについて、こう言われました。

16 彼は、肉につける戒めの律法によらないで、朽ちることのないのちの力によって立てられたのである。

しかし、これはイエス様の事についていることは明白です。メルキゼデクについて、朽ちることのない命の力によってたてられるということは不可能だからです。メルキゼデクはそのような遜扱いとして、ひな形として現れ、そしてイエス様によって成就されたのです。

7:19 (律法は、何事をも全うし得なかったからである)、他方では、さらにすぐれた望みが現れてきて、わたしたちを神に近づかせるのである。

7:22 このようにして、イエスは更にすぐれた契約の保証となられたのである。

7:23 かつ、死ということがあるために、務を続けることができないので、多くの人々が祭司に立てられるのである。

7:24 しかし彼は、永遠にいますかたであるので、変らない祭司の務を持ちつづけておられるのである。

7:25 そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。

7:26 このように、聖にして、悪も汚れもなく、罪人とは区別され、かつ、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとってふさわしいかたである。

7:27 彼は、ほかの大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげる必要はない。なぜなら、自分をささげて、一度だけ、それをされたからである。

7:28 律法は、弱さを身に負う人間を立てて大祭司とするが、律法の後にきた誓いの御言は、永遠に全うされた御子を立てて、大祭司としたのである。

23 かつ、死ということがあるために、務を続けることができないので、多くの人々が祭司に立てられるのである。

人には弱さがあり、死がありますから、務めを退いて次の人に渡し、それがまた繰り返されるというのが祭司の歴史でした。

27 「彼は、ほかの大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために…」
また人には祭司であろうとも、自分の身の罪をまず贖わなければ神に近づくことは出来ませんでした。しかしメルキゼデクに似た祭司、イエスキリストは「永遠にいますかたであるので、変らない祭司の務を持ちつづけておられ」、「イエスは更にすぐれた契約の保証」であり、「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。」とある通りです。

7:26 このように、聖にして、悪も汚れもなく、罪人とは区別され、かつ、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとってふさわしいかたである。

7:27 彼は、ほかの大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげる必要はない。なぜなら、自分をささげて、一度だけ、それをされたからである。

7:28 律法は、弱さを身に負う人間を立てて大祭司とするが、律法の後にきた誓いの御言は、永遠に全うされた御子を立てて、大祭司としたのである。

神様は、すぐれた望みが現れてきて、わたしたちを神に近づかせるため、更にすぐれた契約の保証を与えるためにイエス様を私たちに与えて下さいました。

神様は救いの律法の後に、さらに勝った誓いのおことばを語り掛けて下さり、「永遠に全うされた御子を立てて、大祭司と」されました。

7:25 そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。

さらにすぐれた望みが現れてきて、わたしたちを神に近づかせる、イエスは更にすぐれた契約の保証となられたという御言葉はなんと美しいのでしょうか。人があまりにも頑なになり、無力となり、律法には出来なくなってしまったことを神様は新たな誓いとして救いを成し遂げて下さいました。

24 しかし彼は、永遠にいますかたであるので、変らない祭司の務を持ちつづけておられるのである。

25 そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。

28 律法は、弱さを身に負う人間を立てて大祭司とするが、律法の後にきた誓いの御言は、

永遠に全うされた御子を立てて、大祭司としたのである。

この神様の救いの恵みに感謝し、メルキゼデクのように自由に救いの計画をお開きになれるお方を心を柔らかくして受け入れたいと願うのです。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。祭司職が始まる前に現れ父祖アブラハムの捧げものを受けた不思議な大祭司メルキゼデクはイエス様の現われのひな形であることを思いました。しかしイエス様は終わりある人間の祭司ではなくて永遠に生きて変わることはない祭司であり、常に生きていて、執り成してくださり、ご自分を通して神に近づく人々を完全に救うことがお出来になりますから、本当にありがとうございます。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン